

に検索することが必要となる。

ところで氏が本篇結章で今後の課題として、滿漢比率の變動を生み出した清代の歴史の複雑な動向を、さらに綿密に分析し検討していくためには、同學の人々の幅広い研究とその總合に俟たねばならないと述べていられるが、これは綠營軍制についても言えることであり、これこそ清朝政治史研究者に課せられた共通の問題であるといえよう。筆者は先に清朝軍制史の研究動向（清朝軍制の覺書」『東洋史研究』第三十二卷第一號）を公表したが、次の課題として清朝官僚制の研究動向を考察する豫定であり、氏の提示された問題につきいささかなりとも貢獻できれば幸甚かと思つてゐる。

以上、本書の書評が紹介と感想に終つたのは一つには氏の檢證された個々の内容が餘りにも膨大で、一々検討する時間的餘裕がなかつたためであり、この點心苦しく思つている次第である。ただそれにも拘らず本書を取りあげたのは、本書が清代官制の研究者にとって必須の著作だけになるべく早くその内容の梗概を明らかにしたかつたことと、今一つは氏の研究視角に對して筆者なりの私見をのべ、氏を始め清代史研究者の御批判を仰ぎたかつたからである。尤もその私見が或は氏の眞意を十分咀嚼せず曲解しているかも知れないが、その點は御海容を賜りたい。今後氏が本書の研究の中で提示された諸問題につき一層研究を深められると共に、筆者を始め後學のためによき示唆を與えられんことを切に祈るものである。

（大谷敏夫）

Металлургия и металлообработка

У чжурчженей в XII веке

—По материалам исследований

Шайгинского городища—

В. Д. Ленков

Новосибирск, "Наука" 1974, 172с.

本書は、現在、ソ連科學アカデミー極東科學センター極東民族歴史・考古・民族誌學研究所で考古學を専攻されている著者レニーコフ氏の歴史學修士 кандидат исторических наук の學位論文で、「十二世紀女眞の冶金と金屬加工—シャイガ城址の調査資料による—」という表題に示されている通り、プリモリーエ地方のシャイガ城址（Аглас мираに Шайга 河という地名があり、形容詞形の Шайгинское はこれから派生したと考えられる）から出土した金代の北東地域の女眞の遺物をもとにして、その金屬生産と加工の方法と技術を明らかにした考古學の研究論文である。

前半部分では、シャイガ城址での溶解爐その他の生産設備と金屬製品の發掘狀況が、後半部分では、化學分析や顯微鏡分析等を使った遺物の分析の結果が、詳細に述べられている。特に、後半の科學的分析の應用は、金代女眞の遺物について初めての試みであり、それによつて、我々は、金代女眞の金屬生産と加工の方法と技術について、最初の科學的な知識をえたと言えるのである。

シャイガ城址は、ブリモリーエ南部のバルチザンスク區のプロロフカ村の北東約九キロ、セルゲーエフカ村の南三キロの、丘で囲まれた谷にあり、全長三千六百メートルの不規則な形をした土壘が、まわりにめぐらされている。

シャイガ城址は、一八九一年に鑛山技師イワノフ Д. П. Иванов によって、初めて紹介されたが、その後長い間、調査をされないまま忘れられていた。しかし、一九五三年になって、自らの記録をもたない極東の諸民族の過去を明らかにするために極東考古學調査隊が組織されて、各地域で活動を開始し、そして、六二年に、その一隊がシャイガ城址で試掘した結果、土壘の内部から、住居と溶解爐のあとがある人工的に造られた階段状のテラスが現われた。このとき集められた資料によって、シャイガ城址は、十二世紀末から十三世紀初めにかけての遺跡であると推定された（著者は、その根據を擧げていないが、本書の全體から判断して、北宋の銅錢と共に、金の正隆元寶と大定通寶がみつかったこと、鑄鐵製の鍋の上半分、十二世紀の女眞に特有な裝飾である、鍋の口に沿って平行に走る幾筋かのもりあがった線があったこと等の理由が考えられる）。六三年に、再度の準備調査が終つて、翌六四年から、遺跡の本格的な發掘が始まった。その結果、七一年までに、シャイガ城址の一部分の住居七十餘、宮殿風の建物二工房 мастерская 六、内城 редут 一の調査が完了した。本書は、このときまでの資料によつてゐる。しかし、この外の部分の發掘は、今なお進行中であり、因みに、七四年には、十九の住居と一つの工房が發掘されている。

私は、考古學についてまったくの門外漢であり、適任とは言えないのだけれども、本書が、我國の女眞族社會史の研究に大いに裨益

するであらうと考へ、紹介の筆をとらせていただいた。以下順を逐つて、要點を述べていきたい。

序論

金屬生産と加工の技術に關する研究は、その民族の社會と文化を研究するための基礎であるが、女眞については、その資料が極めて乏しいために、これまでほとんど行なわれなかつた。しかし、六〇年代のブリモリーエの各遺跡、中でもシャイガ城址の發掘によつて、十二世紀女眞の金屬生産の設備や金屬製品が大量にみつき、研究の條件が一應整つた。この上になつて、本書では、

- (1) 金屬製品を形と働きによつて分類する
- (2) 製造方法の特徴を明らかにする

(3) 科學分析の方法を使つて、金屬生産と加工の技術の特徴を明らかにする

の、三點の課題が設定される。このために、化學分析や顯微鏡分析等を應用する外、方法論として、ソ連の考古學者によるルスの金屬生産と加工についての研究の成果が參考にされる。

第一章 十二世紀女眞の鑄造と鍛冶業の考古學の遺跡

「女眞の冶金生産の狀況と發展の短い歴史的な概観」

最近の考古學の研究によると、ブリモリーエの金屬生産の起源は古く、例えば、鞞鞞のシーエ・スカリイ遺跡では、鐵鑛石、スラグ（鑛石を製鍊するときに見える非金屬の物質）と鑄型がみつかり、十一世紀女眞のエカテリーノフカ城址でも、スラグの堆積が發見された。しかし、當時の金屬生産は、おそらく小規模なものであつたにちがいない。十二世紀に入つて、女眞帝國（本書では、金と言う

代りに、この表現が用いられているが成立すると、金屬業を始めとして、あらゆる手工業が大きな發展を遂げた。製品を大量に生産できるようにして、その交換が盛んになると、交易と手工業の中心として、都市が形成された。シャイガ城址は、そうした都市の一つで、そこには、金屬關係の職人ばかりでなく、陶工、大工、石工等も生活していた。

「シャイガ城址—女眞帝國東部に於ける最大の手工業中心地の一

〇」

シャイガ城址の六つの工房は、全てその南西部の、パタレイヌ川に近い低い位置のテラスの上に造られていた。全體として、溶解爐等の生産設備だけからなる第一型式(工房1、2、5)と、生産設備と共に職人の住居が並んで建てられている第二型式(3、4、6)の二つのグループに分けられる。初めに、第一型式の工房2について、次のような状況がみられた。層位に關しては、一様に、表面の厚さ10cmの腐植土層の下にすぐ、厚さ15—20cmの遺物を含む黒い砂質粘土層が続いているのが観察できる。工房2は、大型溶解爐 *плавильная печь* 八(—VIII)、小型溶解爐 *плавильный горн* 二(K—X)、鍛冶爐一(XI)、鑄造坑 *формовочная яма* 三(XII—XV)で構成された、當時としては高能率の工房であった。中央の鍛冶爐を除き、全體が、北東と南西の二つの部分に分かれ、各々に必ず、大、小の溶解爐と鑄造坑が入るように配置されていた。北東では、眞中で大型溶解爐IとIIが向い合い、その北に、鑄造坑XIIとXIIIが、間に小型溶解爐IXを挟んで直線上に並んでいた。南西では、中央の空間に向けて、そのまわりを圍むように、大型溶解爐III—VIIが並び、その間に小型溶解爐Xと鑄造坑XIVが入った。この計劃

的な配置によって、溶解から鑄造までの工程を連続して行なうことができ、あわせて、爐をうけもつ職人の數も最小にすることができた。

大型溶解爐は、自然通風であった。平面は臺形で、前が幾分狭まり(前1.3—1.4、後2、奥行2.3—3.0)、天井はアーチ形であった(高さ1.1—1.2m)。耐火粘土と礫の基礎の上に、同じ規格の煉瓦(30×15×5cm)で厚さ約30cmの溶解槽 *плавильная ванна* を造り、上から粘土の天井でおおった。爐の前の地面にはいつも箱型の穴が掘られていた(排滓室 *сливная камера* 縦30—60、横20—25、深さ20—35cm)。

小型溶解爐は、長方形のくぼみの中に建てられており、後壁近くに、石を置いて穴が造られていた。爐の前の部分は、煉瓦で敷きつめてあったが、その下に、爐の穴にまで達する二つの送風路が掘られていた。送風路の中で、送風の量を調節するための鐵製の蓋がみつかった。また、送風路の入口に近い地面には、皮製の端を固定しておくための柱の穴が二箇所みつかった。

發掘のとき、工房2で、多數の鐵製品に混って、切り取ったあとのある鐵塊や途中まで造りかけた鍔の鐵板、そして様々な陶器片がみつかったのが注意される。

次に、第二型式に屬す工房6は、約1.5mの高度差がある二枚のテラスに跨っていた。ここでは、大、小の溶解爐と並んで、職人の住居が幾つか建てられていた。低い方のテラスにある住居41中では、三列の平行な炕(女眞の住居に特有の暖房設備)の竈の中で、スラグと金屬塊 *коротек* (溶解のとき、技術が未熟で、スラグと一緒に金屬の一部が出た)がみつき、近くにまた、底に銀が圍着

した鑄造用のひしゃくが落ちていたので、41の坑の竈の中で、金屬の溶解が行なわれたと推測できる。

高いテラスにある住居48は、貴金屬工の住居あとで、鑄造用のさじ、金敷、それから、鑄型がびったり合わなくて隙間から流れ出てしまった青銅の鑄物くすと坩堝の破片がそこで集められた。

住居52の出土品のうち、穴のあいた大鍋が注目される。その上からかぶせてあった二箇の小さな鍋をあげると、中から犁先や鍋等の鑄鐵製品の破片と、斧や錠等の鐵製品（鐵 *железо* は鑄鐵 *чугун* 以外の鐵を表わすらしい）の破片、それに、大量の第一の海綿鐵（後述）が出てきた。この断片は、52の隣りにある大、小の溶解爐で用いるために、わざわざ集められたものである。

工房6の小型溶解爐は、工房2のそれと、大體同じ構造をしているが、ただ、送風路の代りに、穴の背後に、煙道が掘られており、先端で、高い管とつながって通風を良くした。

工房6では、こうして、様々な金屬の溶解から加工までの工程が行なわれていた。

この外、住居の中にある特別の爐でも、金屬の溶解と加工が行なわれた。既にみたように、坑の竈が使われることもあった。その場合、竈は、普通のものよりもずっと深く、また幅も廣い。住居14の坑の竈の中には、焼けた土、スラグ、木炭片が残っていた。近くの地面には、融けた鑄鐵のはねて出た塊があった。

住居の中に、小さな爐が造られることもあった。住居46の中央に、三方が石でできた爐があった（ 20×20 、深さ 30 cm）。爐の傍の地面に、鞆を置いたあとがあって、そこから爐の底まで、送風路がついていた。

「女眞のその外の金屬生産業の中心地」

黑龍江省阿城縣小嶺地區で、女眞の鐵鑛山と五十箇所餘りの製鐵遺跡が發掘された。その際、鐵鑛石や木炭、スラグは相當量あったのに、鑄型や製品は一つもみつからなかった。これは、製鍊と鑄造の工程が互いに獨立していたために、この地區では、鑛石から海綿鐵を還元するだけで、できた海綿鐵は、阿什河を通して他の場所に運ばれて、そこで溶解と加工が行なわれたからである。

プリモリーエのスカリストイエ・ソプキの斜面にある古城址でも、金屬生産の設備がみつかったが、シャイガ城址と大體同じような狀況が認められた。大、小の溶解爐のあとと、城址の南部のテラスの上にあった。大型溶解爐は、建築材料に石が使っている點を除けば、シャイガ城址のものと同じ構造であるし、小型溶解爐も、全體の形はわからないが、シャイガ城址の工房2のXと同じ鐵の蓋を備えていた。ところが、ここでは、シャイガ城址と違って、鑛石から海綿鐵を造る最初の工程が、海綿鐵を溶解し加工する第二の工程と並んで存在した。

第二章 十二世紀女眞の鐵鋼生産と加工

「シャイガ城址の大型溶解爐と小型溶解爐の設備とその働き」

六つの工房には、全部で、大型溶解爐一五、小型溶解爐五、鑄造坑六があったが、既に大體の構造はふれたので、ここでは改めて説明しない。

シャイガ城址の工房では、その化學組成によって、軟鐵 *мягкое железо*、浸炭された鐵 *науглерожненное железо*、そして鑄鐵の三種の製品が造られた（普通、炭素含有量によって、少ないものから鍊鐵、鋼鐵、鑄鐵と分けるので、或いは、これに各々對應する

かもしれない。しかし、工房では、原鑛石の褐鐵鑛は一片も發見されず、二種類の海綿鐵だけがみつかった。シャイガ城址には、鑛石から海綿鐵を造る第一の工程は存在せず、海綿鐵を溶解、加工する第二の工程だけが存在した。第一の海綿鐵 *чешуйчатая* は、まだスラグが多く、鍛鍊するためには、スラグを出して、組成を均一にする必要がある。一方、第二の海綿鐵 *крупная* は、均質な組成で、鍛治加工に用いることができ、表面には、質を檢査するために切ったあとがあった。

大型溶解爐の内部には、一樣に、上から、腐植土層、天井が落ちてきた焼けた黏土層、そして灰を含む土の層の順に、堆積していた。最下の土の層から、時々、厚い坩堝の破片が出たのに對して、スラグと金屬塊は、爐の中では一片も發見されず、きまつて、爐の前の排滓室の中に流されていた。坩堝を使って、その中で溶解したのである。また、工房6の住居52の、溶解のために大鍋に集められた色々なものの断片から判斷して、鑄鐵の溶解には二通りの方法があった。鑄物のくずを再溶解する方法と、第一の海綿鐵に炭を加えて溶解する方法である。さらに、大型溶解爐は、非鐵金屬の溶解と、陶器に釉をかけるためにも使用された。

小型溶解爐でも、海綿鐵と非鐵金屬の溶解が行なわれていた。

「鐵製品の特徴とその加工」

鍛冶爐は、全部で四基あった。詳細な構造はわからないが、加工に必要な高温を得るために、備を備え、それで爐に空氣を供給した。爐の周圍で、多数の鐵製品と共に、鍔の鐵板等の半製品がみつかったことが注目される。

鐵工具としては、金敷、鐵槌、やすり、たがね、鉞等が知られて

いる。この外に、出土していないが、製品に使ったあとが残っている道具も幾つかある。こうした工具は、他の民族のものと比較しても、大きな違いはない。例えば、やすりには、刃が一方だけに刻まれた荒削り用と、二方向から直角に刻まれた仕上げ用の二種類があった。ただ、やすりをかけるときに必要な萬力は、まだみつかっていない。

鍛冶屋は、これを用いて、農具(鋤、鎌)、鐵工具、木工具(鋸、鉋、斧、のみ)、日常品(ナイフ、鍋、錠)を造った。そのとき、熔接や浸炭の技術を使うこともあったが、特に、全鋼 *цельно-стальной* の製品を幅廣く製造していた。

眞直な刃と彎曲した背をもつ鎌は、全鋼製で、刃は焼入れがされてきた。また、二十三本のナイフは、大部分がまだ還元の不十分な鐵の上から、刃の部分に薄い鋼を鍛接し焼入れがしてあった。鐵には、戦闘用と狩獵用とがあり、前者の一つは、不均等に浸炭された鋼製で、先端の炭素含有量が、柄に近い方よりも大きく、そして、焼入れされていた。

「鑄鐵製品の特徴」

融けた状態の鑄鐵を用いて、種々の鑄物を製造した。鍋、金敷、犁先、軸承等が知られているが、形と大きさが様々なことで、鑄物の鍋が注目される。丸い穴の軸承は、周圍に數箇のつめが附いている。大部分が炭素含有量 1.5% 以下で、表面には、鑄型の注入口のあとや、模型を鑄型から抜きやすくするための抜け勾配が觀察できる。

工房5の鑄造坑に、人工的に造った褐色の鑄物砂が残っていた。

第三章 女眞の非鐵金屬の生産と加工

「非鐵金屬の合金の特徴とその製造」

發掘中に、金、銀、銅、青銅等の非鐵金屬製の裝飾品、帶の留金、首輪、護符がみつかったが、大部分が、青銅製の鑄物であった。

前述のように、非鐵金屬も、工房の大、小の溶解爐や住居の中の爐、そして炕の竈で、溶解されていた。シャイガ城址では、非鐵金屬の鑄石からの製鍊は行なわれず、製品くずか、或いは特別の半製品をきまつた量だけ切つて、坩堝の中で溶解して、それから、板等の合金の塊を鑄造した。必要なとき、その合金の塊を削つて、製品を造つた。

「非鐵金屬製品の特徴、その製造方法、そして加工」

鑄造は、最も廣範に行なわれた。鑄型は、遺跡の内部で一箇みつかった。鑄型には、製品に附いたあとから、單型 Односторонний と兩型 Двухсторонний の二種類があったと推測できる。單型は單純な形の鑄造に用い、上から平たい石でそれをおおつた。兩型は、物體の外形を、上下兩方の鑄型にうつしたもので、やや複雑な形を造ることができる。さらに、製品に耳や穴を附けたいときには、中子を用いた。時々、蠟型を使って、鏡や鈴を製造することもあった。

様々な作業を行なうためには、多くの種類の加工道具が必要である。鐵槌、たがね、やすり、鋏等が発見されているが、そのうち、鐵製のピンセットが注意される。これは、固定するための道具で、兩足の間にものを挟むことができる。中には、外側から青銅製の輪をかけてあるものもあった。

貴金屬を鍛鍊して、厚さの薄い裝飾品を造つた。工房4の銀碗、住居13の銀製のヘアピン、住居48の腕輪がそうである。また、このような非鐵金屬製品の表面には、象眼、打出し、めっき、はんだ付け等の細工が施されることもあった。

結論

シャイガ城址は、當時の經濟的中心地の一つで、色々な手工業が行なわれていた。特に金屬加工業が盛んであった。金屬加工關係の仕事場は、社會經濟的な意義によつて、二つに分けることができ。まず、シャイガ城址の一區域に集中している住居の中の仕事場である。ここでは、自家手工業者が働いており、彼ら相互の間には、封建的な關係が成長しつつあった。次に、國家の工房である。ここでは、國家の職人が働いていた。このような職人達の間には、専門化がおこつていた。

以上が、本書の大略である。續いて、氣附いた點を幾つか述べてみたい。

おそらく、出版のときの事情によるのではないかと思うが、前後の關係で、讀者を混亂させるような箇所があった。それは、鍛冶爐の周圍でみつかった柱の穴の目的に關する説明である。初め(三七、六〇頁)、それが、雨を防ぐためのひさしを固定する穴だとされているのに、後の部分(六六、六七頁)で、爐の上に通風を良くするための管をとりつける穴だと改められている。そうであるなら、前の部分もそれに統一するべきであつたと思う。さらに、シャイガ城址の都市計劃(七〇頁)と大型溶解爐の機能(一〇三頁)について、最近の研究の結論(おそらく、論文を書いてから出版まで

の間に新しく得られたものだろう)が、ほとんど説明もなしに途中に附け加えてあるので、これについては、將來、改めて、説明をしてほしいと思う。

ところで、著者は、鑄鐵の溶解過程を詳細にあとづけることはまだできないと慎重な態度をとっておられるが、念のために、鑄鐵中の燐の問題について指摘してみたい。化學分析表(九〇、九一頁)によると、シャイガ城址の鐵製品(鑄鐵製品を除く一八例)の燐の含有量が、 $0.036-0.106\%$ 、平均 0.058% であるのに對し、鑄鐵製品(一二例)は、 $0.15-0.36\%$ 、平均 0.21% と、平均で鐵製品の約三、六倍である。これについて、著者は、どちらの場合も、燐は、鑛石から入ったと述べられている。さて、シャイガ城址では、二通りの方法で、鑄鐵を溶解していた。このうち、鑄物くずを使う方法は關係ないが、残る海綿鐵を用いる方法の溶解の工程が問題となる。海綿鐵(五例)の燐の含有量は、 $0.088-0.15\%$ 、平均 0.083% と、數値がかなりばらつく。だから、鑄鐵を造るために、燐の含有量の多いものを選んで使ったとも考えられる。しかし、この外にもう一つの可能性がある。燐には、本來、鑄鐵中に於いて、その溶解温度を下げ、流動性を良くする性質がある。もしも、この性質を利用して、海綿鐵を坩堝で溶解するときそれに燐を加えたとしたら、その結果、鑄鐵製品の燐の含有量は、當然多くなるはずである。因みに、他の城址の出土品も、例がわずかだが、鐵製品(三例)が、 $0.052-0.074\%$ 、平均 0.060% 、鑄鐵製品(四例)が、 $0.18-0.25\%$ 、平均 0.22% と、同じ傾向を示している(これに關連して、似たような事例がある。山西の傳統的な製鐵では、溶解を進めるために、坩堝の中に、鑛石と一緒に、燐の化合物を含む

「黑土」を加えて了(J. Needham, 'The Development of Iron and Steel Technology in China, 1964, pp. 14, 15. 村上英之助『古代東方の鐵冶金』『鐵』一九七四、一四四頁参照)。將來、これについても検討していただきたいと思う。

終りに、本書によつて、どういふ問題が提起されるのか考えてみたい。精密な分析は、専門家の手に委ねねばならないが、爐についてみると、女眞の爐は、宋の爐をそのまま移したのではなく、かなり個性的なものである。女眞の爐では、最初に、鐵鑛石から海綿鐵を還元し、次に、海綿鐵をさらに加工して鍊鐵にしたり、或いは、坩堝で溶過解して鑄鐵を造っていた。これに對して、宋の爐は、はるかに性能が良くて、強力なポンプ型の輪を備え、鐵鑛石から鑄鐵(鉄鐵)を直接鍊煉することができた。そして、爐から流れ出た鑄鐵(鉄鐵)をかきまわして、直ちに鍊鐵に變えたのである(吉田光邦「宋代の鐵について」、『東洋史研究』二四—四、『中國科學技術史論集』所收一九七二)。こうして、一般に、女眞の間には、水準は低いかれども、獨自な製鐵技術の傳統が存在していたと考えられる(しかし、これは、女眞と漢民族の技術が、全く無關係であつたということではない。反對に、女眞が既に鑄鐵製品を造っていた事實等は、漢民族との關係を示すだろう)。それについて、ソ連のプリモリーユと同時に進められた中國の東北地區の金代女眞の遺跡の發掘で、多數の鐵製の農具、工具、馬具、日用品がみつかったのが注意される(肇東縣博物館「黑龍江肇東縣八里城清理簡報」、『考古』一九六〇—二等參照)。この中で、鑄鐵製の特有の裝飾線のある鍋等は、ほぼ東北地區全域にわたつて分布し、かつその數量も極めて多い。このことは、女眞の鐵製品の生産が、同じ様な技術的な

基盤の上に、様々な場所で廣く行なわれていたことを物語るものであろう。そして、この鐵製品を用いて行なった生産活動もまた、それ故に、一時の皮相な現象ではありえないであろう。その意味で、今まで漠然と抱かれてきた女興社曾についての全般的なイメージを、一つ一つ再検討するための基礎が本書によって與えられたのである。

以上、本書の要點と氣附いた點を大まかに述べた。著者が非常な

努力を傾けられた鐵製品の加工技術の説明は、手に負えず、ほとんどふれることができなかつた。その點を著者に深くおわびしたい。本書を紹介するにあつて、多くの方々から懇切な教えをいただいた。それがなかつたならば、この紹介は書けなかつたであろう。ここに記して、その感謝に代えたいと思う。それにもかかわらず、數多くの誤りを犯しているであろう。その責任は、全て私自身にあり、おゆるしをいただきたいと思う。

(松浦茂)

「東洋史研究」バックナンバー在庫一覽

| | | | | | |
|------------|--------|------------|--------|------------|--------|
| 第二十四卷第三號 | * 九〇〇圓 | 第三十卷第二・三號 | 一、二〇〇圓 | 第三十四卷第一〜三號 | 各九〇〇圓 |
| 第二十七卷第一〜三號 | 各九〇〇圓 | 第三十卷第四號 | 一、二〇〇圓 | 第三十四卷第四號 | 一、二〇〇圓 |
| 第二十八卷第一號 | * 九〇〇圓 | 第三十一卷第一〜三號 | 各九〇〇圓 | 總目錄 | 一、〇〇〇圓 |
| 第二十八卷第二・三號 | 一、二〇〇圓 | 第三十一卷第四號 | 一、二〇〇圓 | (*印殘部僅少) | |
| 第二十八卷第四號 | 一、二〇〇圓 | 第三十二卷第一〜三號 | 各九〇〇圓 | | |
| 第二十九卷第一號 | 九〇〇圓 | 第三十二卷第四號 | 一、二〇〇圓 | | |
| 第二十九卷第二・三號 | 一、二〇〇圓 | 第三十三卷第一〜二號 | 各九〇〇圓 | | |
| 第二十九卷第四號 | 一、二〇〇圓 | 第三十三卷第三號 | 一、二〇〇圓 | | |
| 第三十卷第一號 | 九〇〇圓 | 第三十三卷第四號 | 九〇〇圓 | | |

以上のお申し込みは左記へ

京都市左京區吉田本町

京都大學文學部内

東洋史研究會

振替 京都 三七二八番